

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第52号 : 榮新江先生来日号
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 52 p.1-p.6
Issue Date	1991-01-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78863
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吐魯番出土文物研究会会報

1991年1月1日
吐魯番出土文物研究会

第52号

榮新江先生
生来日号

榮新江先生の来日

【はじめに】

北京大学中国中古史研究中心の副教授で、敦煌研究院の兼任副研究員でもある榮新江先生が龍谷大学の招きで、昨年八月末に来日され、この二月末までの半年間の予定で日本に滞在されています。先生は主として龍谷大学で研究に従事されているほか、昨年十一月一九日（月）から三〇日（金）までの一二日間、上京して東京大学東洋文化研究所、同文学部、東洋文庫、東京国立博物館、および静嘉堂文庫などを訪問され、資料・文献の蒐集にあたられました。この間東京で、「唐開元廿九年（七四一）西州籍」について」（十一月二四日（土） 於東京大学東洋文化研究所）、「九、十世紀歸義軍時代の敦煌佛教」（同月二六日（月） 於駒沢大学仏教学部）の二講演を、またその後京都でも、「現代中国における中央アジア研究」（一二月三日（月） 於京都大学人文科学研究所）、「中国敦煌吐魯番研究現況」（同月一八日（月） 於龍谷大学文学部）の二講演をされています。なかでも東大における講演は、いままで紹介されていなかった北京大学図書館所蔵の表題にある三件の戸籍断片に関するはじめての紹介であり、かつ復元作業としてきわめて注目される内容のものでした。

吐魯番出土文物研究会では、先生の上京期間中である十一月二二日（木）に、在京の会員が集まって懇談会をもちましたが、ここには、先生ご自身から提供していただいた資料をもとにして、先生の略歴と著作目録を掲載することにしました。

◆榮新江先生略歴

1960年3月18日、天津市生。

1982年8月 北京大学歴史系本科、卒業。

1985年9月 北京大学歴史系碩士研究生（隋唐五代史専攻）、修了。

この間、1984年9月から1985年7月まで、オランダ・ライデン大学の中国研究所の客員研究員。

あわせてイギリス、フランス、ドイツ、デンマーク、およびスウェーデンなどで資料蒐集に従事。

1985年9月 北京大学歴史系、中国中古史研究中心の助教に就任。

1987年9月 同 講師。

1988年9月 同 副教授。

1990年9月から1991年2月まで、日本・龍谷大学の仏教文化研究所の客員研究員。

1990年12月現在 敦煌研究院兼任副研究員、中国敦煌吐魯番学会理事。

このほか、西域文化読書会、中亜文化協会、唐史学会、および蔵学中心などのメンバー。

◆榮新江先生著作目錄

A 論文（表題のまえの＊印は、張廣達先生との共著であることを示す）

- (1) ＊「關於唐末宋初于闐國的國號・年號及其王家世系問題」北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』北京 中華書局 1982年 179～209
- (2) ＊「和田、敦煌發現的中古于闐史料概述」『新疆社會科學』1983年第4期 78～88
- (3) 「敦煌卷子札記四則」北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』第2輯 北京 北京大學出版社 1983年 631～673
- (4) ＊“Les noms du royaume de Khotan, Les noms d'ère et la lignée royale de la fin des Tang au debut des Song”, Contributions aux études de Touen-houang, III (Paris, 1984), 23～46, pls. I～IV.
- (5) 「遼寧省檔案館所藏唐蒲昌府文書」『中國敦煌吐魯番學會研究通訊』1985年第4期 29～35
- (6) 「歐洲所藏西域出土文獻聞見錄」『敦煌學輯刊』1986年第1期 119～133
- (7) ＊「敦煌『瑞像記』、瑞像圖及其反映的于闐」北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』第3輯 北京 北京大學出版社 1986年 69～147, 圖二〇～三四
- (8) ＊「于闐佛寺志」『世界宗教研究』1986年第3期 140～149
- (9) 「歸義軍及其與周邊民族的關係初探」『敦煌學輯刊』1986年第2期 24～44
- (10) ＊「敦煌文書P. 3510（于闐文）《從德太子發願文（擬）》及其年代－《關於于闐國的國號年號及其王家世系問題》一文的補充－」敦煌文物研究所編『1983年全國敦煌學術討論會文集』文史・遺書編（上冊） 蘭州 甘肅人民出版社 1987年 163～175
- (11) 「從敦煌的五台山繪畫和文獻看五代宋初中原與河西于闐間的文化交往」『文博』1987年第4期 68～75
- (12) 「九、十世紀于闐族屬考辨」『新疆社會科學』1987年第4期 76～83
- (13) ＊“Notes à propos d'un manuscrit chinois découvert a Cirra de Khotan”, Cahiers d'Extrême-Asie: Revue de l'Ecole Française d'Extrême-Orient, Section de Kyoto, No. 3 (1987) 77～92.
- (14) 「吐魯番的歷史與文化」胡戟・李孝聰・榮新江編『吐魯番』西安 三秦出版社 1987年 26～85, 圖1～16
☆和訳：青木茂・關尾史郎訳註「吐魯番の歴史と文化」（Ⅰ）～（Ⅳ・未完）『吐魯番出土文物物研究会會報』第34, 35, 47, 48号 1990年 1～6（第34号のみ、1～5）
- (15) 「吐魯番文書《唐某人自書歷官狀》所記西域史事鉤沈」『西北史地』1987年第4期 53～55
- (16) ＊「巴黎國立圖書館所藏敦煌于闐語寫卷目錄初稿」北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』第4輯 北京 北京大學出版社 1987年 90～127
- (17) ＊「《唐大曆三年三月典成銑牒》跋」『新疆社會科學』1988年第1期 60～69
- (18) ＊「關於和田出土于闐文獻的年代及其相關問題」『東洋學報』第69卷第1・2号 1988年 59～86
- (19) 「敦煌文獻和繪畫反映的五代宋初中原與西北地區的文化交往」『北京大學學報』1988年第2期 55～62
- (20) 「敦煌的興衰及其在中國歷史上的地位」『文史知識』1988年第8期 23～29
- (21) ＊「有關西州回鶻的一篇敦煌漢文文獻－S. 6551講經文的歷史學研究－」『北京大學學報』1989年第2期 24～36
- (22) 「晚唐歸義軍李氏家族執政史探微」『文獻』1989年第3期 87～100

- (23) *「上古于闐的塞種居民」『西北民族研究』1989年第1期 172~183
- (24) *「關於敦煌出土于闐文獻的年代及其相關問題」『紀念陳寅恪先生誕辰百年學術論文集』北京中華書局 1989年 284~306
- (25)「關於沙州歸義軍都僧統年代的幾個問題」『敦煌研究』1989年第4期 70~78
- (26)「沙州歸義軍歷任節度使稱號研究」中國敦煌吐魯番學會編『敦煌吐魯番研究論文集』上海 漢語大詞典出版社 1990年 768~816
- (27)「小月氏考」『中亞學刊』第3輯 1990年 48~63
- (28)「新出吐魯番文書所見唐代西域史事二題」北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』第5輯 1990年 339~354
- (29)「《唐刺史考》補遺」『文獻』1990年第2期 80~94
- (30)「敦煌學研究揭開晚唐五代宋初西北史的新篇章」『中國文化』第2輯 1990年 7~9
- (31)「沙州張淮深與唐中央朝廷之關係」『敦煌學輯刊』1990年第2期 1~13
- (32)「從《海州大雲寺禪院碑》看海州在唐與新羅文化交往中的地位」張殿臣他編『連雲港與海上絲綢之路』北京 海洋出版社 1990年 183~200
- (33)「通類考」『文史』第33輯 1990年 119~144
- (34)“mThong-Khyab or Tong-jia 通類:A tribe in the Sino-Tibetan frontiers in the 7th-10th centuries”, Monumenta Serica(forthcoming).
- (35)「龍家考」『中亞學刊』第4輯(待刊)
- (36)「曹議金征甘州回鶻史事表微」『敦煌研究』1991年第2期(待刊)
- (37)「公元十世紀沙州歸義軍與西州回鶻的文化交往」第二屆敦煌學國際研討會(1990年7月 於台北)提出論文
- (38)「張氏歸義軍與西州回鶻的關係」敦煌研究院1990年敦煌學國際學術討論會(1990年10月 於敦煌)提出論文
- (39)「唐宋時代于闐史概說」『龍谷史壇』(待刊)
- (40)(尚林、方廣錫と共著)「中國所藏「大谷收集品」概況」龍谷大學西域文化研究會(待刊)

B 翻 訳

- (1) 烏瑞「有關公元751年以前中亞史的藏文史料概述」『藏族研究譯文集』第2輯 1983年 93~107
- (2) 烏瑞「KHROM(軍鎮):公元七至九世紀吐蕃帝國的行政單位」『西北史地』1986年第4期 106~113
- (3) 彼得森「哥本哈根皇家圖書館藏敦煌寫本」『敦煌學輯刊』1987年第1期 132~137
- (4) 宇野順治「民主德國科學院藏西域出土文獻的國際合作研究情況報告」『中國史研究動態』1987年第8期 30~33
- (5) 井之口泰淳「于闐語資料所記之尉遲王家的系譜和年代」『新疆文物』1988年第2期 113~124
- (6) 蒲立本「鋼和泰藏卷年分考」『新疆文物』1988年第2期 125~131
- (7) 哈密屯「公元851-1001年于闐年號考」『新疆文物』1988年第2期 133~138
- (8) 貝利「于闐王國」『新疆社會科學研究』1989年第3期 37~43

C その他

- (1)「法國科研中心敦煌文獻研究組的研究工作」『中國史研究動態』1981年第9期 27~28
- (2)「歐洲所藏西域出土漢文寫本調查隨記」『中國史研究動態』1986年第10期 24~29

- (3) 「台北“敦煌学国際研討会”論文評介」『中国史研究動態』1987年第2期 22～28
 ☆再録：『敦煌学』（台湾）第13輯 1988年 181～189
- (4) 「池田温教授談海外敦煌吐魯番文書研究現状 附：池田温教授主要著作目録」『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1987年第1期 26～31
- (5) 「日本“敦煌学”研究簡介」『文史知識』1988年第8期 108～112
- (6) 「關於敦煌和田出土于闐文獻年代問題研究概況 附：敦煌于闐文写本研究文獻目録」『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1988年第1期 17～27
- (7) 「《中国所藏敦煌写本聯合目録》編写芻議」『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1988年第2期 55～58
- (8) 「日本“青年敦煌学者協会”簡介」『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1989年第1期 23～28

このほか『中国大百科全書・中国歴史巻』、『敦煌学辞典』、および“Encyclopaedia Iranica”などの項目を執筆。

『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』総目次(Ⅱ)

吐魯番出土文物研究会編

【は じ め に】

本誌の総目次については、総第1期（1984年第1期）から総第15期（1988年第2期）までを対象とした片山章雄編「『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』総目次」を、その解題である片山章雄「『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』について」とともに、第19号（1989年8月15日発行）に掲載する機会があったが、その後、本号に特集した栄新江先生により、総第16期（1989年第1期）から総第18期（1990年第1期）までの三冊が将来されたので、ここに「『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』総目次」の(Ⅱ)としてこの三冊の目次を掲げることにした。体裁は前篇と全く同じである。

☆	☆	☆	☆
■ 1989年第1期（総第16期）／1989年6月刊			69頁
「目録」			（表1）
潘重規「關於《敦煌雲謡集新書》敬答任半塘先生」			（1～7頁）
（中国敦煌吐魯番学会）「中国敦煌吐魯番学会常務理事会關於增補王東明同志為副秘書長的決定」			（7頁）
方広鋸「也談敦煌写本《衆經別録》的發現」			（8～13頁）
馬大東「簡論隋唐書法中的經生体」			（14～16頁）
耿昇「法国学者推出敦煌学新作」			（17～22頁）
荣新江「日本“青年敦煌学者協会”簡介－附：青年敦煌学者協会成員主要論著目録－」			（23～28頁）
劉方「日本“吐魯番出土文物研究会”成立－附：吐魯番出土文物研究会會員論著目録－」			（29～34頁）
〈日〉小田義久／李德龍訳「大谷探検隊在新疆境內的活動」			（35～41頁）
辛夷「《敦煌文学作品選》読後」			（42～44頁）
（無記名）「郭在貽同志追悼会在杭州举行」			（44頁）

[學術信息]

趙崇民「西伯林《吐魯番藏品》概要」	(45~46頁)
王進玉「敦煌壁面中的科學技術」	(47頁)
〈韓國〉李秀雄／鄭芳明訳「《敦煌文學》訳本“序文”」	(48頁)
（王 点）「日本舉行法日中垂出土文書與檔案學術討論會」	(49頁)
（王 点）「台灣舉行國際唐代學術會議」	(49頁)
（王 点）「《漫步敦煌藝術科技畫廊》出版」	(49~50頁)
（東 木）「《魏晉南北朝隋唐史資料》出版」	(50頁)
高國藩「台灣敦煌學國際研討會論文綜述」	(51~58頁)
師 勤「一九八八年敦煌吐魯番學著述資料目錄」	(59~69, 34頁)

■ 1989年第2期（總第17期）／1989年12月刊 70頁
「目錄」 (表1)

張鴻勳「敦煌俗賦《茶酒論》與“爭奇”型故事」	(1~11頁)
------------------------	---------

[青年論文選登]

徐慶全「高昌、西州時期量制考」	(12~20頁)
張志勇「從吐魯番出土文書看唐代均田制的土地來源」	(21~27頁)
韓建瓚「關於敦煌文學分類的一點淺見」	(28~34頁)
王 珏「敦煌寫本《西天路竟積地》」	(35~46頁)
〈日〉入矢義高／任道軒訳「關於王梵志」	(47~59頁)
〈日〉長沢和俊／李德龍訳「敦煌平民生活與社的關係」	(60~64頁)
[國內敦煌吐魯番學研究機構簡介]	
（盧秀文）「敦煌研究院簡介」	(65頁)
（黎 薈）「西域藝術研究會隆重召開成立大會」	(66~67頁)
（辛 夷）「《敦煌石窟藝術論集》簡介」	(68~69頁)
（徐 淳）「《敦煌曲子詞欣賞》讀後」	(69~70頁)
（丁 煌）「《敦煌醫粹—敦煌遺書醫藥文選校釈》出版」	(70頁)

■ 1990年第1期（總第18期）／1990年6月刊 70頁
「目錄」 (表1)

金建民「關於《敦煌曲譜》和古譜學的論爭」	(1~8頁)
楊富學「海內外見刊回鶻文社會經濟文獻總目」	(9~23頁)
〈法〉戴 仁／耿 升訳「敦煌的經折裝寫本」	(24~30頁)
季羨林「關於“奈河”的一點補充」	(30頁)
〈日〉入矢義高／任道軒訳「關於王梵志（續）」	(31~44頁)
〈日〉高田時雄／梁海星訳「九—十世紀河西地區漢語方言考」	(45~50, 55頁)
遲 聞・陳 東「《敦煌變文集補編》讀後」	(51~55頁)
（無記名）「著名音樂理論家葉棟教授在瀘病逝」	(56頁)
（劉進寶）「蘇聯列寧格勒藏敦煌寫本簡況—與緬什科夫（孟列夫）先生一席談—」	(56~58頁)
[簡訊]	
（楊 森）「列寧格勒藏敦煌文獻將在瀘出版」	(58~59頁)
（楊 森）「孟列夫參觀訪問莫高窟」	(59頁)
師 勤「一九八九年敦煌吐魯番學著述資料目錄」	(60~70頁)
	(以上)

覚書：武威出土の前凉木牘について

昨秋、国内でも入手可能になった李均明・何双全編『散見簡牘合輯』（北京 文物出版社・秦漢魏晉出土文献、1990年7月）には、中国各地から出土した簡牘類が出土地ごとに収録されているが、そのなかに「甘肅武威旱灘坡19号晋墓木牘」として、五点の木牘が紹介されている（26～29頁）。これは従来その存在が知られていなかったものだが、本書とほぼ時を同じくして入手した『文博』1990年第3期に掲載されていた田建「甘肅武威旱灘坡出土前凉文物」によれば、旱灘坡一九号墓は、甘肅省文物考古研究所が1985年の7月から8月にかけて発掘した二九基の西晋・「五胡」期の墓のうちのひとつであり、最も保存状態がよく、五点の木牘以外にも三点の俑、毛筆や筆筒などが出土したという。

さて五点の木牘の内訳は、（a）「建興卅三（三五五）年十二月本郡清行板」（M19:60／合輯245）、（b）「建興卅四（三五六）年九月駙馬都尉板」（M19:60／合輯246）、（c）「建興卅八（三六〇）年四月建義奮節將軍長史板」（M19:61／合輯247）、（d）「升平十三（三六九）年七月姬瑜随葬衣物疏」（合輯248）、（e）「咸康四（三三八）年十一月某女随葬衣物疏」（合輯249）である。前三点は男女合葬墓の男尸の胸部や頭部近くから出土したとのことだが、いずれも墓主である姬瑜の生前の任官書である。これによると、姬瑜は先ず清白異行に挙げられ、翌年には駙馬都尉、さらにその四年後には將軍府の長史に移り、その官を最高官としてさらに九年後に死去したことがわかる（前凉にあっては駙馬都尉が称号の一種であったことは、前後の王朝と同じであろう）。もちろん彼がこれら以外にもいくつかの諸官を歴任したことは木牘からもうかがうことができるが、合葬されている女尸が彼の妻、とくに公主であったとは考えられない。残念ながら田建氏は二点の随葬衣物疏には言及していないので、この点についてはなお今後の課題としたい。

さてこの五点の木牘に類似した史料は吐魯番出土文物のなかにもある。任官書については、阿斯塔那一七七号墓から出土した「承平十三（四五五）年四月追贈且渠封戴敦煌太守板」（詳細は周偉洲「試論吐魯番阿斯塔那沮渠封戴墓出土文物」〈『考古与文物』1980年第1期〉、参照）があるし、随葬衣物疏については例示に事欠かない。むしろ興味深いのは、様式や内容の点では大差が認められないにもかかわらず、吐魯番から出土した四世紀末期の随葬衣物疏はいずれも紙に書写されているのに対し、武威から出土した四世紀中期のこの二点は、ともに簡牘だという事実であろう。さらに言えば、吐魯番と武威の中間に介在する敦煌からは紙と簡牘とを問わず、現在まで随葬衣物疏のごとき文書は一切出土しておらず、陶罐や陶鉢がその機能を一部代行していたと思われる事実である（この点については、町田隆吉「敦煌出土四・五世紀陶罐等銘文について—中国古代における葬送習俗に関する覚え書き—」〈『東京学芸大学附属高等学校大泉校舎研究紀要』第10集、1986年〉、参照）。したがって紙の普及の問題とともに、葬送習俗の問題についても、新たな問題を提起していると言えよう。

また（e）の「咸康」とは東晋の元号（三三五～三四二年）で、この時期武威を拠点とした前凉が東晋の元号を奉用していたことになるが、これも従来類例がなかったものである。前凉が複雑な国際関係のなかで様々な元号を奉用したことは疑いない事実なので、この元号を奉用した可能性も十分に考えられる。写真の公表をまって検討をすすめたいと思う。（關尾）

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴 方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)